

# 特集

## 知的障害のある人の高齢期における発達保障

特集にあたって

### 人間の尊厳にふさわしい「老い」を支えるために

田中 良三

たなか りょうぞう  
あいち発達障がい研究所、  
本誌編集委員

高齢期への関心は高まっている。本特集を企画・編集中に、私に関わる障害者福祉運動団体でも、重度の知的障害の子どもをもつ親を中心に、高齢期に備えた親子共同ホームの見学（一泊研修）と講演・シンポジウムに取り組む計画を立てた。もう一つのNPO法人の理事会でも、知的障害者の「老化」に対応する日中活動の場を作っていくことになった。

1970年代に始まった知的障害者の働く権利の保障をめざす作業所づくり運動のなかで、全国各地に日中活動の場としての作業所や授産施設・更生施設が誕生し、あわせて暮らしの場としてグループホーム・ケアホームなど生活施設づくりが進められた。今日、これらの福祉現場では、高齢期を迎えた知的障害者とその親の加齢・高齢化に伴う健康・生活問題に直面している。

本特集では、この問題を、権利としての発達保障の視点に立って、福祉・心理・医学による各理論研究と福祉現場の実践報告からアプローチした。

植田論文は、「知的障害のある人（壮年期・高齢期）の健康と生活に関する調査」をもとに、加齢に伴う能力の低下と支援状況を明らかにし、知的障害者の高齢期の生活をより豊かにするための権利保障の課題について論及している。高林論文は、知的障害者とその家族の老いの過程と暮らしの実態の検討し、それは半失業・貧困・健康破壊の構造的な問題であり、障害者運動の要求も実現されず経済的にも政治的に

も不当に低い地位に置かれていると論じている。小川論文は、重度知的障害者には早期老化現象が見られ、種々の機能低下や意欲の低下があること、外見の老化や脳の萎縮も早く進み、悪性腫瘍や認知症を合併するリスクも高く、摂食機能や呼吸機能の障害が進行すると述べている。張論文は、50歳以上の知的障害者にインタビューを実施し、知的障害があっても、親の変化を感じ取り不安や寂しさを感じていること、このような思いをゆったりと聞く心理的支援をする職員配置が求められると述べている。白石論文は、知的障害者の加齢変化について事例からその発達の変化を探ろうとしている。その結果、高齢期の知的機能低下は単純ではなく、複雑かつ個性が強いこと、また、発達の新たな獲得もあることを明らかにしている。

森脇報告はグループホームを利用する40代の女性の体調変化の見極めと対応について、太陽の里職員集団報告は高齢期に当面する問題を仲間としてみんなで支えあうことについて、佐藤報告はターミナル期を含む高齢化・高齢期の実態と向き合う職員の支援の在り方について、井上報告は作業所における加齢・高齢化に伴う支援の在り方について論じたものである。いずれも知的障害者の加齢・高齢化、高齢期に取り組む先進的・モデル的な実践である。

とはいえ、この問題についての実践と研究は近年始まったばかりである。この特集が、この問題へのきわめて貴重な実践的理論的提起となることを期待している。